

撃つ夏

神野麻郎

六時過ぎに仕事は終わった。洋次は作業所の入り口の水道のところで、顔を洗い、口を漱いだ。三人の通いの職人たちがそれぞれ律義に、「お先に」と叔父にあいさつして、車やバイクで帰っていった。

「洋、今晩はウチで食べていけ」と奥の事務所の方から叔父のだみ声がしたが、洋次は、「いや、今日はちよつと野暮用が」と断った。

「そうか。週末やしな。まあ、若いのやから、楽しめ。俺も久しぶりに遊びに行きたいとこやけど、カミサンがうるそうてな。あいつ、週末の夜になったらベッドで待ちかまえとんのや。派手なもん着てやで。かなんで」

いつもの癖のある引きつったような笑い声が続いた。

着替えて奥の方に声をかけてから、作業所の裏手に停めてある自分の車まで歩いた。西空が夕焼けて、ものみながわずかに黄金色を帯びている。空き地や溝の夏草がもう青々としている。洋次は身体にそれほど疲れが溜まっていないのを確かめながら、発進させた車を自分のアパートの方ではなく、山の方に走らせた。五分も坂を上ると、まだ建っている家もまばらな新しい造成地があり、その奥の一段高いところに場違いな感じで古い神社の森が見えた。

鳥居のそばに車を停めると、洋次はランニングの恰好でその八十段ほどの石段を駆け登った。上に着くと身体をひるがえして駆け降りた。そうして三度ほど往復した。一週間前よりは身体を軽く感じたが、もう汗がにじんできた。それから人気がない境内の社殿の横手の空き地で、上着を取り靴も脱いで柔軟体操を始めた。念入りにスクワットや股割りなどをした後、基本の型から入った。四股に構えてイヤーツ、イヤーツと気合を入れながら五十回、百回と拳を突き出しているうちに、息がはずんできた。基本の後、型を四つほどこなした。終わって深呼吸すると、やや冷えてきた境内の空気が重く沈んでくるのがわかった。

木の根元で足を胡座に組んで、息をおさめながら瞑想にかかった。しかし、こいつはいつもうまくいかない。心を空にしようと努めるそばから、かえってやすやすと日ごろの雑念が侵入してきてたちまちとらわれてしまう。動いている間は無心でいられるのだが。そうや、昼間、ヤスの奴から電話があったな。遠回しに言いよったが、結局また、明日ケンカになりそうやから、加勢してくれ、いや、兄に見てもろとるだけでもええから、みたいな話だったわな。ダルい話や。あ

いつはええ齡して、いつまでそこのジャリみたいなことやっつとるんや。もちろんすぐに断ってやったが。やめとけ、ともゆうてやったが。明日は美紗とも会うし、そんな暇はない。第一、もうそんなアホに付き合えるか。……美紗。一週間も逢うてないな。このごろ、あんまりアパートにも来んようになったし。電話もろくにしてないか。バイトが忙しいゆうてたけど、ほかに男ができたのかもわからん。男友達は何人かおる、ゆうてたしな。そんならそれでええ。ただ、あしたはあの感じやすい身体を、思いきり抱いたる。……

あかん、あかんと首を振って洋次は立ち上がった。そばの檜の幹に向かって、突きや蹴りを入れた。いつも同じ木の同じ場所を撃つので、そこだけ外皮がはがれ落ち、白い木肌がのぞいている。その幹に拳や脚のすねが重たく受け止められ、骨のきしむ感触があった。やはり今度の大会には久しぶりに出てみよう、と思う。長く離れていたの、自信はない。しかし、一週間ほど前、久しぶりに道場に顔を出して汗を流したとき、師範から今度の大会に出てみるよう勧められたのだ。「ちようど、予定していた選手が一人出られんようになってな。代わりにどうや。半月稽古積んだら、おまえやったら大丈夫や。ええとこいけるで。実績あるんやしな」。久しぶりの稽古が気持ちよかったの、つい「はあ、考えてみますわ」と気楽に答えたのだったが。ふだんもランニングや多少のトレーニングは自分でやっている。しかし一人ではどうしても手を抜いてしまうし、身体にも贅肉がついていた。何より実戦から遠ざかっているのが気がかりだった。

攻撃のコンビネーションを丹念にやり、最後にシャドウで十分ほど動き回って終わりにした。そのころには森の気はもう深い青に変わっていた。

「そうなんよ。一回付き合って五万円やって。いい稼ぎになるやろ。もう、これに味しめたら、ふつうのバイトなんてやってられへんわ、ってその子、ゆうのよ。べつにおかしな子やないねんよ。ふつうの子。ああ、あたしもやつちやおうかなあ。ただ横になつてればいいんだって。楽だしさ、お金は入るしさ。それに、そんなこと、今のうちしかでけへんもん。洋ちゃん、怒った？ふふ、冗談よ、冗談。あたしがそんなことできるわけないやろ。でもさあ、どう、五万円って安いと思う？それとも高い？女子大生よ」

ベッドに裸で寝そべったまま、美紗が熱心にしゃべっているのは、美紗の大学の友達の一人が最近始めたといういかかわしいバイトのことだ。美紗のまわりでは平気で「援助交際」やそんなバイトをやっている学生がいるらしい。

美紗と話していると、まったくこいつら学生はどうなつとんのやと洋次は思うことがある。美紗から大学の勉強の話聞いたことはいっさいない。俺より二つ下だから、今年はまだ三年生にもなっているはずだ。大学の文学部というのは、

何も教えないところらしい。服や化粧で身をつくろって、バイトと遊びをじやらじやらやっていけばいいのか。四年間も。そんなちやらちやらしたやつらが街のどこにでもおる。学生というだけで、世の中けっこうそれで通るらしい。おかしなことや。

「何やってもええけどな、そんなことしか考えられへんのか、おまえら。ほかにもつといろいろすることあるやろ。いったい何のために大学行ってんねん。金は仕事して、苦勞して稼ぐもんやろ。若い奴でも、汗流して働いとる奴、いっぱいおるぞ」

「そらそうやけど……。ああ、やっぱりな。洋ちゃん、きつとそうゆうと思たわ。あたしもそれくらいのことわかっとなるけど。そやけど、ええバイトにはちがいないやろ。なあ」「世の中、おかしななってんねん。どこもかしこもな」とだけ洋次は吐き捨てるように言った。手を伸ばし、美紗の朱をさしている片方の乳房をやや乱暴につかんだ。あえぐかたちに少し開かれた美紗の唇から、「洋ちゃん、痛い」と声もれた。

美紗も高校時代はもつと目に光があつて、きりつとしたところのある子だった。洋次が三年生になった四月に、軽音楽のクラブに入部してきた目のよく光る女の子を、洋次は思い出している。少女のきまじめさをまだ残しながら、人の顔を真正面から見て、しゃべり方にも幼い堅苦しさがあつた。「先輩、先輩」と慕ってきいた声が、まだ耳の奥に残っている。もつともあのころは俺の方がすすんでいて、クラブもよくサボつたのだったが。美紗は大学に入ってから、だんだん、あいまいな軟体動物に変わっていった。何を意志してどこを向いているのか、つかみどころがなかった。ただ、遊びや食事やアルバイトやの、目の前の小さな快楽に身をゆだねて漂っている。そしてそんな漂い方にこれといって不満も抱いていないようだった。その脂の乗った軟体動物を、洋次は苛むように攻めたてた。

ベッドを降りてベランダに立つと、海峡の海がぎらぎらと光っていた。船が東西から引つきりなしに狭い海峡に押し寄せては離れていく。潮は今は西に流れているのか、東行の船はとどこおり、西行の船はスムーズにすべっていく。対岸の島の岬の緑が青くかすんだ中に、ずんぐりしたかたちの白い灯台が見える。その潮が流れ、船の交通する開かれた海峡の眺めが、洋次は子供のころから好きだった。波の光も、潮を含んだ風のおいも。もう一時間もすれば日が暮れていく。夕日が海を染めると、洋次はなぜだかなつかしいような気分になる。

海峡のまん中で巨大な吊り橋の工事が進んでいる。美紗とたまにこの海べりのホテルにくるようになって、洋次は海に面した部屋からその橋のかたちが成長していくのを眺めるのが楽しみになった。叔父の小さな鉄工所で作るものと、この海に横たわる鉄の怪物とは何の関係もないが、大小の差はあれ、設計図から一つ

のものを作っていくという過程は変わりなかった。遠くからはミニアチュアのようだが、それでも見つめていると、あちこちで飛ぶバーナーの火花や黄色いヘルメットをかぶった作業員の顔の汗まで、ま近でみるように想像できた。直立する鉄の柱の塗料のにおいを嗅ぎ、風のうなりや接合部のきしむ音を聞くことができた。

あの橋が完成したら……何もかもすっかり変わるだろう……。いつもの空想が洋次の頭にやってきた。そのときからこの海峡は、それまでとはちがった、まったく新しい時間を生かすはじめる。いつかたもとの方から見上げた橋の姿が、洋次は忘れられない。空を覆ってコンクリートの橋台から海のまん中へと突き進んでいく鉄の組み物。力を矯め、弧を描いて果敢に這いわたつていく太いロープの束。海中に屹立する銀色の巨大な主塔。あれは、橋というものではなかった。あれは……巨大な龍や。龍が生まれたら、世の中も変わるはずや。それまでの薄汚い、あいまいなものは否定されるだろう。確かなものが生まれるからや。そしてそのときには、俺自身も激しく変わるはずだろう……。

バスロープをゆったりと着て、

「洋ちゃんはやっぱり海が好きなんやね。ああ、いい景色だ」と美紗も出てきて白い椅子に掛けた。飲みさしの缶ビールを二本、丸いテーブルの上に置いた。表面に汗をかいている缶が光の暈でくるんだように白く輝く。海の上から斜めに差し込む初夏の透明な日差しは、美紗の組んではだけた腿の上にも踊った。一口ビールを含み、

「ああ、いい気持ちだ」と美紗はほおづえをついて瞼を閉じた。かたちのよい唇が少し開き、全身の力が抜けて、どこまでもやわらかな表情だ。また自分自身にうっとりしているのかもしれない。

いっしょに街を歩いていても、美紗は自分に陶醉して他人の存在を気にしないようなところがあつた。近いところも遠いところも見えていなかった。ただ自分自身にうっとりして、自由というよりも、無防備に身体を投げ出していた。

洋次はたとえば電車に乗って吊り革を持つ場合でも、前に坐っている男の脚の位置が気になる。蹴り上げられた場合、すぐには股間をやられない位置に立つ。街なかでも、身体が無意識に周囲の男たちとの間合いを測っている。高校生のころから身についた、自然な防衛の感覚だった。いつか美紗に突然後ろから抱きつかれたとき、とっさに身体を回して危うくこめかみに拳を入れてしまいそうになったことがある。それで、「洋次はいつも身構えているんやね。何もかも忘れてリラックスするということがないんやね」と美紗になじられたものだ。そうかもしれない、とそのとき洋次は思った。洋次の生き方のことを美紗は言ったのだろう。しかし、流されていけないためには、常に自分の身を守ることが必要だった。

まぶしそうに目を細めて美紗が、

「シキン、溜まってる？」と聞いた。

「ああ」と洋次はやはり海峡を眺めながらも憂い調子で答えた。「シキン」といえば二人の間の符牒のようなもので、何年かの歴史がある。将来、どこかの街角に小ぎれいな喫茶店をもつ、それが高校時代からの美紗の夢だった。一時期、二人はその夢をつむぐのに熱中した。

洋次は喫茶店の経営など苦手だと思っていた。叔父の鉄工所で、鉄材を相手に油にまみれて働くことに大きな不満はなかった。加工の技術を習得して、将来自分も小さな鉄工所でも経営できたら、というささやかな希望をもっているくらいだった。美紗は違った。洋ちゃんが鉄工所やるのは、それはそれでええけど、あたしはまず喫茶店を開いて、それを大きくしてやがては会社組織のレストランにするの。その女オーナーになって、ゆったりと暮らすのよ。高校生の美紗は大きな目をみひらいてそんなふうになつて、熱っぽく語った。夢半分だが、その夢の店のインテリアや、開業資金がいくら要る、頭金をいくら用意して、どの銀行からいくら借りて、などの話は、どこから知識を仕入れてくるのか、おそろしく具体的だった。それならそのシキンを二人で溜めようと、洋次は貯金をふやし、美紗もバイトに精を出した。まだ十代だった二人は、よく互いの通帳を見せて騒ぎあった。だがその夢も、今はもやい綱の解けた空のボートのように、たよりなくどこかに漂っている。「あたしの方はゼンゼンだめよ。ごめんね」

それはそうだろう、多少バイトに励んだところで、やれファッションだ、友達と旅行だ、コンサートだ、と浮ついているのだから、と言いつ返すのも洋次はもの憂かった。

「就職したら溜めるからね。学生時代はさ、何よ、いろいろ世の中を見ておかなかちや。そう思うの。……でもその就職がな。先輩の話聞いてると、やつぱり今どきは大変みたいよ。春先からもう四十社も回ってね、それでも内定をもらえない先輩もいるのよ。それでふつうなんやつて。面接でセクハラみたいなのも訊かれたらしいよ……」

有用な人材として会社に自分を売りこむために、技術を身につけるとか資格を取るとか、何か努力をしているのか、という言葉も洋次は呑みこんだ。本気になつていない人間に何を言ってもしかたがない。疲れるだけだ。

雲のかげんで、海峡が少しかげってきた。まん中よりもこちらに近い海面の一带に、潮の流れと逆方向に風が起こったのか、急に三角波が立った。洋次は話題を変えた。

「次ぎの日曜日にな、大会がある。久しぶりに出てみようと思うんや。おまえ、来るか」「そうなん」と美紗は少し驚いた顔をした。もうやめたのではなかったの、

と聞いたげだ。「そやけど今度は簡単に負けるかもしれへんで。練習不足やから」
「洋ちゃんにしては弱気なんやね」と美紗は笑った。そしてさらにいたずらっぽい目付きになり、

「行つてあげるよ。ただしもう一回してくれたらね」とバスローブの前をはだけた。胸のふくらみから腿までがあらわになった。白いすべらかな腹が赤味を帯びて、弱い日差しのなかで波打っている。

車で美紗を家まで送つてアパートに帰ると十時を過ぎていた。近所の公園でラニングと柔軟だけでもやろうとまた出ようとしたところへ、康彦から電話がかかった。

「兄い、やつとつかまつたぜ。美紗さんと逢うとつたんやろ。ズボシやろ」電話の向こうでヤスはいやらしく笑った。洋次はわずらわしかつたので、「何や」と強く言った。

「兄いなあ、今日は大変やつたんやで。話聞いてもらお思て。近所におるんや。すぐ行くわ」答える暇もなく、ヤスは電話を切った。

五分もたたないうちに部屋にころがりこんできたヤスは、相当酒臭かった。兄い、ウイスキーでもないかというので、アホ、十分酔っぱらつとるやないか、おまえに飲ませる酒なんかないで、と洋次はそっけなくした。

「冷たいな、兄いは。まあ、そんなことはどうでもええ。兄い、今日は気持ちよく、やつつけたつたで。気持ちよくな」

「またやつたんか。おまえ、齢なんぼになつたんや。ええかげんにせんかい」赤い顔をして腰を抜かしたようにへたばっている康彦を見おろして、こいつはどうしようもない、と本気で洋次は思った。あの美紗も、べつの意味でどうしようもないのか。

「三人対五人や。高校生や。ほら、兄いも知つとるやろ。何たら会いう、暴走族の下っ端の奴らや。たいしたことなかつたで。口先だけの奴らや。そやけど、ボケにコンパス、突き立てられてしもて。ここや」とヤスは腕をまくって見せた。二の腕の外側が、少し血糊がついて紫色に腫れていた。

「うまいこと刺さつたなあゆうて、そいつの顔見て、ニカツと、かわいらしゅう笑てやつたらな、そいつ、ビビりよんねん。腹に前蹴り一発くらわしたら、すぐおとなしいなりよつたわ」

洋次は仕方なく救急箱からヨードチンキと包帯を取り出して手当してやつた。すんまへん、すんまへんと、ロレツの回りにくい舌で、ヤスはしきりにわびた。

「兄いの名前出したら、あいつらビビりよつたで。さすが兄いや。鍊修館の洋次ゆうたら、いまだに恐れられとる」

「アホウ。俺の名前や、出すな」

今は何を言ってもこの呑んだくれの耳には入らないことがわかっていたので、洋次は黙っていることにした。

このヤスも高校を中退したのが二年前だから、もう今年は二十歳になるはずだ。いつまでもジャリのケンカにハマっとってどうするんや、何でもええから働けよ、とふだんも言っただけ聞かせることがあるが、直らない。半年ほど前には、叔父に頼みこんで鉄工所でバイトをさせたが、すぐに音をあげてしまった。そのくせ、将来は兄いといっしょに鉄工所やるのが俺の夢や、とうそぶく。見ていると、数年前の俺に似ているが、こらえ性がない。それでいて、過剰なエネルギーを持っている。ぐれた高校生を連れて街をほつき歩いてケンカの種を探している。女をとつかえひつかえ、同棲して、そちらのもめごと絶えならしい。中学生で道場に通ってきたころも、師範の言うことはそっちのけで、ケンカに役立つ技だけを熱心に研究しているような奴だったが。

「兄い、俺こないだな、ダチ連れて、K1見に行ってきたんや。わざわざ、ナゴヤドームまでな。すごかったぜ。マイク・ベルナルドにスタンザ・マンやる。初めて本物見たわ。ごつい身体や。佐竹もおった。それにあの、かかと落としのアーディー・フグな。知っとるやる。スイスの英雄や。そのフグがな、極真のフィリオに、なんとフック一発でやられよった。1ラウンド、一発でノックアウトや。こう、まともにアゴに入ったんやな。そら、すごかったで。あつという間やった。瞬間、ナゴヤドームがしーんとして、次はものすごい歓声や。やつぱりK1はすごいで。ほんまもんやで。兄いも一回見に行たらええわ。ドームが、まっ赤に燃えとったで」

ヤスは腕を振り回していたかと思うと、ごろりと横たわって、仰向き、目を閉じた。そのまま眠るつもりらしい。時々うわごとのように、洋次に話しかける。

「兄い、こないだ、久しぶりに道場行たゆうとったなあ。師範、元氣やったか。

俺、すっかりごぶさたになつてもて。もう、今さら、俺なんか戻れへんやろ」
「兄い、おぼえとるか。ほら、兄い大阪の大会で準優勝したときのことや。俺、はつきりおぼえとるで。兄いの回し蹴り、よう決まったなあ。こう、さつと相手のふところに入り込んで、突きの連発や。中段突き、それにフックや。突いてからコンビで、回し蹴りや。こう、右を中段に、入れて、相手の右が空いたところを、こう、左の上段で仕上げや。相手、簡単に倒れよったなあ。最高にカッコよかったで、あのとときの兄いは。美紗さんも、キャアキャアゆうて。決勝も、ほんまは兄いの勝ちやった。誰が見てもそうやった。審判の目が節穴やったんや。兄い……」

仰向いたまま、診察台の上で眠らされていく犬のように、弱々しく胸の上で腕

を振り、足で宙を蹴っている。

月曜日の朝からはまた鉄工所勤めだった。コンクリを補強する鋼材のクイを日に何百となく作った。プレス機に板金を置き、プレスの後取り出して並べるだけの単調な作業だった。

職人は洋次の他に三人いたが、皆所持持ちで子供も大きい熟練工だった。社長の叔父のほかはあまりむだ話もせず、黙々と働いた。昼休みも、弁当をつかった後は、テレビを見るか将棋に興じるくらいで、事務所の長椅子に横になる者もいた。叔父だけが大声で、野球かテレビの事件を話題にした。たいてい卑猥な冗談が混じった。男たちが笑う中で、近所から事務の手伝いに来ている若い珠ちゃんに困ったような顔をした。

一時になるとまた三人はそれぞれの作業に戻っていった。油に黒く汚れた床の端の方でバーナーの炎が青白く燃えた。旋盤が材料を切削して高い音をたてた。人の動きにつれて、何かの機械が絶えず働いていた。

洋次はその寡黙な人達も、機械や材料や削り屑が雑然と置かれた、油のにおいと音の絶えない作業所も、なんとなく好きだった。鉄板や金属のかたまりに黙々と向かっているのが苦痛ではなかった。努力ははつきりとかたちにあらわれた。自分の作業によって、材料のあいまいなかたちから明確なかたちが現れるのは快いことだった。

単調な仕事も多かったが、叔父は洋次にだんだんと精密さを要する仕事も与えるようになった。洋次は何でも言われるままに仕事に向かった。仕事でも、気合と集中力が大事だと思っていた。中途半端な態度でかかるとよく失敗した。気持ち澄んでいると材料は手になじんできた。モノと一体になる、こんな気分は、うだつのあがらないサラリーマンの父親にも、美紗にもヤスにもわかるまいと思っていた。奴らはいまいな世の中にあいまいなままに生きていた。そしてそういう奴らが世の中をもっとあいまいにしていた。

洋次は仕事中でも、ホテルのベランダから見るとあの海峡の吊り橋をよく思い返した。日を受けて銀色に輝く橋、あの橋は一頭の巨大な龍だ。そして完成したとたんに龍は、おびただしい海水を巻き上げながら悠然と空に躍り上がって、力を誇示するだろう。そこから人間も世界もすべてが変わっていく。確かなものが生まれるからだ。薄汚いもの、あいまいなものは否定され、すべてが新しくなるだろう。人々は未知の世界に入るだろう……知ってか知らずか、何というものを人間は造っているのか。夕方になると、橋にはだんだんと灯がともった。巨大な龍の身体が、満ちてくる力を潜めながら暗い水の上に静かに横たわっていた。

仕事が終わると毎日、雨の日でも、洋次は神社の境内に出かけて闇が覆うまで

練習した。身体はだいぶ軽くなってきた。突きや蹴りに鋭さが戻ってきた。それである夕方は、友達の生田を境内まで呼び出して、組手の相手になってもらった。生田は中学時代から、流派はちがったがやはり空手をやっていて、その流派の地区大会で優勝したこともあり、洋次とはいってもいい勝負だった。「このころは仕事に忙しゅうてな、なまっとるよ。太ったしな」と言いながら、向かい合ってみるとやはり以前の生田で激しい空手だった。大柄な生田に、洋次は苦戦したが、間合いの感じや攻撃のリズムは多少取り戻せたようだった。終わると洋次は礼を言っ、生田を駅前の居酒屋に誘った。

道場にも夜、二回ほど顔を出した。サンドバッグやミットを蹴り、巻藁を突いて汗を流したが、しかし練習生には高校生や、まだ始めて日の浅い、会社帰りのサラリーマンたちしかいなかったの、あまり組手の稽古にはならなかった。

明日に試合をひかえた土曜日の、小雨降る午後のことだった。配達先からの帰り、洋次が営業用の軽トラックを運転していると、バイクが数台爆音をあげて追い抜いていった。さかんにクラクションを鳴らすので、このアホウらが、と思っていたら、バイクは洋次の車の前に出るとスピードを落とし、蛇行を始めた。で、洋次はブレーキを踏み、スピードを落とさなければならなかった。二車線の道を対向車線にまではみ出して四台が蛇行するので、追い越すこともできなかった。うちの二台は二人乗りをして、何やら派手な旗を振っている奴もいる。振り向いて洋次の顔をのぞきこみ、しきりに奇声をあげる奴もいる。洋次には見覚えのない、若い奴らだった。「アホめらが。どかんかい」と洋次は車の中で怒鳴ったが、聞こえるはずもない。

ふと洋次は、二三日前にヤスから電話があったことを思い出した。

「こないだやつつけた暴走族の奴らがな、根に持って仕返ししたる、ゆうてきてますねん。俺らだけやつたらええけど、兄いの名前出したもんやから、兄いもいでもたるゆうてますねん。ほんまに、すまんことで。ま、そういうことやから、兄いも気をつけてや」。

そんなダルい電話で、そのときは気にも留めなかった。

するとこいつらはその連中か。俺と知って嫌がらせしとるらしい。洋次は相手になるつもりはなかった。しかし、後ろに車が五台、六台とだんだん詰まってきた窮屈だった。それで、クラクションを激しく鳴らしてみた。前にはだかる連中はしかし、ますます勢いづくように湿った路面で蛇行を繰り返した。これが三年前やったら、皆引きずりおろしていてもたったやろな、と洋次は苦笑した。

そんな頭を押さえられたような恰好のまま、二、三分も走ったろうか、前方の交差点で信号が赤に変わった。連中はどうするか、と見ていると、四台ともが行

儀よく並んで白線の前で停まり、威嚇するようにエンジンをふかした。こちらを振り向いて嗤っている奴もいる。洋次は車にサイドブレーキをかけるとすばやくドアを開けて外に出た。頭の中は冷静だった。三台がすぐに爆音をあげ、赤信号もかまわず逃げ出した。逃げ遅れた一台の後ろにまたがっていた男の襟首をつかむと、男はもろくも腰から地面にくずれ、バイクの方は走り去ってしまった。洋次はその倒れた男の頭の上から、「何のつもりや、おまえらは」と怒鳴りつけた。頭をかばう両手の下で、若い、知恵のなさそうな顔がすでにおびえていた。細い雨の筋がその髪や顔に降りかかった。神経質な犬のような男のおびえを確かめると、洋次はもう何も言わず、手を離して車に帰った。信号が変わったのでゆっくりに発進させると、へたりこんでいた男はあわてて歩道の方へころげた。Gパンの尻がべつとりと汚れていた。

少し先でバイクの群れがエンジンをふかしながら待ち構えていた。近づいた洋次も、それを少し通り越したところで歩道に乗り上げて軽トラックを停めた。後方に数珠つなぎになっていた車は、どれもクラクションも鳴らさず、バイクの男たちや洋次を大きく迂回すると疾走していった。

洋次は外に出て、また「おまえら、何のつもりや」と怒鳴った。一人がバイクにまたがったままで黒いヘルメットをゆっくりと脱いだ。やはり見覚えのない、瘦せた顔の男で、雨をうるさがるように目を細め、固めた頭髪をしきりに撫でつけながら、

「あんたが空手の洋次さんかよう。あのボケがあんまり言うもんで、ちよつとあいさつに来たつたわけよ」

低い声がふてぶてしかった。

「ヤスのことか」

「おうよ。あのボケ、今ごろビョーインだろうけどよう。昨日、きつちりいてもたつたからよう」

「ヤスに何したんや、おまえら」

男はにやりとした。

「あのボケから聞いたらええやろ。ま、今日は顔見せだけや。ま、兄さん、このツラ、ようおぼえとつてや」

初めから闘うつもりはないらしい。やがてバイクの群れはけたたましく去っていった。

洋次はその足でヤスのアパートに寄ってみた。女がいるかと思ったたら、ヤス一人で、カーテンを半分以上閉めた薄暗い部屋のベッドにひっそりと寝転んでいた。頭と、肩から胸にかけて包帯をして、顔が無惨に腫れていた。「ひどいもんやな」と入っていった洋次に、それでもヤスは起き上がりながら相変わらず達者な口で、

「兄い。頼むから明かりつけんとつてやー。女みたいなことゆうけど、光がまぶしゆうて。…急に襲ってきやがったんでよう、よける暇がなかったん。卑怯な奴らやで。一人に五人もがかかってきよんのや。…すんまへん、兄い。兄いにも迷惑かけたみたいやな。みつともないカッコ見せてしても、恥ずかしわ」

ビールの空き缶がいくつもベッドの下にころがり、部屋じゅうが酒臭かった。女はどうした、と訊くと、

「ゆうべ、俺、血だらけで帰ってきたやろ。ぼかぼかにやられた顔で、ただいまーゆうたやろ。そしたら、キヤーツ、て、こわがってしても。どっかへ逃げていたわ。その後、電話もなし。それだけの女や」

「その恰好やったら、食事にも困るやろ」

「いや、何とも。まあ、ダチが世話してくれまっさ。心配いらん」

口では強がっていたが、さすがに傷が痛むのか、ヤスは顔をしかめながらゆっくり仰向けに寝た。洋次は少し笑って、

「傷ついた狼が穴ぐらで静養しとる具合やな。ええかげんにしとけてゆうたやろ」

ヤスも軽く笑った。

「兄い、仕事の帰りか。ご苦労さんや。そこらにビールあるやろ。ダチに買いに行かしたんや。勝手に飲んでや」

そして、ヤスは目を閉じ、しばらく沈黙した。薄暗い中で、洋次は床に散らばっているゴミを片付け、流しの汚れ物も洗ってやった。すんまへん、すんまへんとヤスはしきりに気の毒がった。また洋次がベッドのそばに坐ると、ヤスは珍しくしみじみとした調子で言うのだった。

「兄い、そやけど、兄いと道場に通とったところがいちばんよかったなあ。サイコーやったなあ。俺、ようこのごろ思い出すんや。道場で兄いに向かっていって。負けてばかりやったけど。あのころは、何か生活に、こう、リズム、あったなあ。いっぱい悪さも、ケンカもしたけど、さっぱりしとった。後に残らんかったなあ。何でか、このごろは何してもさっぱりせんねん。心の中に、こう、重しができたみたいで。何やっても、シンから楽しいことないねん。どしたんやろなあ、俺。ゆうべもな、こうやって寝ながら、一晩中それ、考えとつてん。俺、ビョーキみたいや」

「珍しく弱気やんか、ヤス」と洋次は笑って、

「そら、おまえもだんだん大人になってきたいうことや。そんな気分は俺にもおぼえあるで」

「やられたって、べつに悔しいないねん。やって、やられて、もうそんなことどうでもええような気がするねん。重たいもんだだけが、なんかこう、心に残って、

気分悪いねん」

「何か仕事見つけるや。仕事しだしたらすつきりするわ」

「仕事か。それも考えた」

このヤスも、今までガソリンスタンドや警備会社やに勤めだしたこともある。しかしどこも長続きはせず、勤め先で事を起こして捨てぜりふを吐いて辞めてくるのがオチだった。「兄い。すまんけど、また兄いの鉄工所、口きいてくれへんか。前のことあるし、もうあかんかな。オヤっさん、怒っとつたし」

「さあな。わかれへんけど、まあ、口はきいたつてもええ。そやけど、今度は一週間でケツ割ったら承知せえへんで。仕事は地味やで。カッコ悪いで。しんどいもんやで」

「わかつとる、わかつとる。がんばるわ。なんせ、兄いと鉄工所やるのが俺の夢なんやもんなあ。がんばらな。ああ、仕事か……」と天井を向いたヤスの目からは、ふと見ると涙がこぼれているのだった。幼い表情に見えた。組手で洋次にやられてもやられても涙をにじませながらかかってきた中学生のヤスを思い出した。月曜日にでも、早速叔父に話してやるかと洋次は考えた。

帰り際に、

「兄い、あしたはがんばつてや。久しぶりに兄いの試合、見に行きたいんやけど、このザマではな。すんまへん」とヤスは殊勝な顔をした。

体育館は四面ある試合場ごとに人垣ができていた。二階席の前部に関西地区の各本部の旗が垂れ下がっている。その各本部が代表選手を出して点数を競っていた。

洋次は午後からの成人の部の個人戦に出場した。一回戦は苦もなく一本勝ちした。二回戦も大差の判定勝ちだったが、洋次は苦しくなった。三分の試合時間の間、逃げる相手を追いかけてまわしているうちに、息があがった。以前にはなかったことで、やはり半月くらいのトレーニングではだめだと思ひ知らされた。

次の相手は強敵だった。流派の全国大会で何度も上位に入賞したことのある、三間という選手だった。洋次はその顔を見て、三年ほど前に大会で一度対戦したことがあるのを思い出した。そのときは勝ったはずだが、身体はさほど大きくないのに技の切れ味が鋭かったのをおぼえている。その後洋次が道場を離れている間に、三間はどんどん強くなり、流派の中でも有名になっていた。試合の前から、短く頭を刈った三間の自信に満ちた面構えに、洋次は気圧されるようだった。

美紗は二階席から見ていた。すその短い派手なワンピースは客席でも一番目立つよう、洋次はあまりその方を見ないようにした。それでも昼休みは、客席に並んで美紗の作ってきた弁当を食べた。

美紗が高校生のころも、大学に入った年もこうして試合に連れてきたことがあった。美紗は初めこそ男たちが互いの生身を激しく突いたり蹴ったりする試合におびえたが、そのうちに慣れてくると、目を輝かし、喚声をあげた。選手の身体の動きがきれいだと言った。それは洋次が教えたことでもあった。人間同士がおのれの生身の肉体と気力だけをたよりに相手を倒すことだけに集中してぶつかりあう、ほかのことは何も関係ない、そこが純粹でいいんだ、これは信じられることなんだ、と洋次は言った。苦しい稽古をして、五体をできるだけ力強くすばやく、しかも合理的に動かせるように鍛える、相手の攻撃をさばき、自ら攻撃する技をみがく、だから身体の動きがきれいなんだ、と洋次は教えた。洋次が試合に勝つと、美紗はほおを染め、ご機嫌だった。

しかしあのころとは、美紗も、二人の関係も確かに変わってしまったな、と洋次は今、はっきり悟らないではられない。美紗は試合を見ながら試合を見ていない。ほおづえついて、どこか遠い目をしている。でなければ、このごろ手に入れた携帯電話で、たぶん友だちと長々としゃべっている。美紗もすっかりあいまいな奴らの中に入ってしまったのか。俺の方も変わったんやろな。ヤスが言っていた心の中の重たいもの、それは俺の中にもあるんや。いつもあるんや。ヤスのよりも重たいかもしれない。そいつはたぶん、一生なくなることはないんや。だから耐えていかなあかんのや。純粹なもの、がほんまに空手のなかにあるんやろか。それを確かめてみるんや。確かめるためにはやってみなあかんのや。

試合が始まった。三間は鋭い突きや蹴りを初めからどんどん仕掛けてきた。そのむしろ小柄な身体が気迫に満ち、鋼のようになって、洋次は守勢にまわらざるを得なかった。「洋次、下がるな。回れ、回れ」という師範の声を遠くに聞いた。一瞬、三間のローキックが洋次の左腿をとらえた。思わず洋次は前につんのめった。骨を正確に撃ったその蹴りは、当たった瞬間よりも、後になるほど効いてくる。だんだん動けなくなってくる。相手は腿を狙っている。もう一発同じところにくれば、立っていられないだろう。洋次の左右の中段突きも何度か相手の胸や腹をとらえたが、急所は微妙にはずされていた。それに下がりながらなので威力は半減する。ああ、みっともない試合をしとる。美紗にもヤスにも見せられへんで。

このままでは負ける。よし、あれや、あれしかないで、と洋次は苦しい息をつきながらそのチャンスが来るのを待った。だが相手の動きはすばやく、めったにスキを見せなかった。が、相手の方も決定的な技を決められず、焦りが見える。やがて試合時間もなくなろうかというとき、相手が左のジャブから右の正拳を打ち込んできた。洋次はかろうじて左の腕でそれを受け流した。右半身になった相手の身体が洋次の目の前でやや泳ぎ、そこに少しのスキができた。よし、と洋次

はずばやく身体を後ろにねじり、右足を高く振り上げた。かかどが相手の後頭部を直撃するはずだった。自分の体勢もくずれ危険な大技だが、決まれば相手は倒れる。だが、右足が相手の頭に触れたか触れないかというところで、逆に自分の身体の方が床板の上に沈んだ。出会いがしらだった。あの体勢から、どうやって繰り出せたのか、相手も同じ上段の後ろ回し蹴りを同時に洋次の後頭部に見舞ったのだ。その瞬間、洋次は何が起こったのかわからなかった。ただ、気がつく、相手は仁王立ちに立ち、自分は床の上に伸びていて、審判と師範の固い顔がま近にあった。

「兄いよう、疲れるぜ」

石段をランニングしながら、ヤスはもう弱音を吐いている。

「そんなやわな体力で、ようケンカができるな」

「ケンカは度胸や。体力やない。兄いもよう知つとるくせに」

「口閉じろ。黙ってやれ」

洋次の口ききで、初めは見習いということやヤスがまた鉄工所に勤めるようになって二週間余りがたっていた。今度ばかりはヤスも腹をくくっているのか、愚痴はいろいろこぼすものの、休まずに出てきた。ひょうきんところが叔父や職人たちにも気に入られて、すぐになじんでいくようだった。

そのヤスを、今日の夕方は初めてトレーニンングに誘った。ヤスはしぶしぶついてきたという顔だが、始めると多少は真剣味も混じってきた。

もう真夏が近く、少し走ると汗がふき出る。それでも一日中むし暑い作業所に閉じ込められていた身体は、外気を喜ぶようだった。神社の森では、日没を惜しむように蟬がさかんに鳴きしきっている。

いつものように、ランニングの後には社の横手の空き地で裸足になり、柔軟から始めた。四股突きから型に進んだ。ヤスが基本の型すら忘れかけていておぼつかないのを洋次は笑った。ヤスも苦笑しながら、こうか、ああかと洋次の動作をまねた。が、その後で型を二つほどこなすと、

「兄い、休憩や休憩。ああしんど」といって木の根元にへたりこんだ。そして、「ああ、学生のころよりずっと体力落ちとるなあ」と自嘲する。洋次は型を続けながら、「生活悪いからや。きまつとるやる」と容赦がない。

「兄いはまた道場、通いだしたりなんかして、また試合にでも出るつもりか」
「わからん。おまえその、兄い、はやめろゆうたやる」

ずっと年上の叔父や職人たちがいる鉄工所で、兄い、兄いと呼ばれるのはかなわない。「わかつとる、わかつとる。まあ、今はええやんか……そやけど何でもまた稽古なんか始めたんや。こんなしんどいこと」

「わからん。わからんからやっつとるんや。ただ、気持ちがあええ。これだけはわかっつとる。おまえもまた始めろ」

「今のところは遠慮しとくわ。そのうちにな。まあ、これくらいのトレーニングやったら、たまには付き合っつたつてもええで」

「ぐじゃぐじゃ言わんと、早うやれ」

洋次は、あの三間に完敗した試合が忘れられなかった。悔しかったというわけではない。みごとにやられてむしろさっぱりしていた。三間はその後も勝ち進んで、結局優勝した。その小柄な身体が鋭いカミソリのようになって次々と相手をなぎ倒していった。相手の攻撃はほとんどかわされ、三間の繰り出す技は正確に相手の急所を撃った。三間の強靱な、そして孤独な意志のようなものが、そこには光っていた。同じ年恰好の男の上にそうしたものを見つけて、洋次はうれしくもあり、うらやましくもあつた。

試合の後、控室で着替えているとき、その三間が洋次に近づいてきた。

「やられるか思たで。ええ突きやつた」と笑いかけた。目付きは鋭いが、試合場でのようすとはちがって、磊落な男のようだった。

「いや、こつちの完敗やつたわ」と洋次は応じた。

「また、いつかやろな。待ってるで」と三間は笑顔で言い置いて、離れていった。

あいつともう一度やってみよう、という気持ちがあるのうちに洋次のなかに萌した。しかしそのためにはトレーニングを積む必要があつた。焦ることはない、時間は十分にあるのだから。洋次はまた週に二回程度、道場に通いはじめた。

美紗とはもう半月ほど逢っていない。電話も絶えていた。半月前の休日、やはりあの吊り橋の見える海べりのホテルで逢ったとき、美紗は珍しく沈んでいた。どうした、と訊いても首を振っていたが、

「このごろな、あたし、洋ちゃんが見えんようになった。洋ちゃんとな、いっしょに生きてる感じが、このごろ、せえへんねん」と言うのとわつと涙をあふれさせた。

洋次は海峡に銀色に輝く橋を眺めながら、

「ほかに男でもできたんか」とストリートにたずねた。

美紗は答える代わりに、さらに泣いた。それ以上、洋次は問いつめなかった。問いつめたところでどうなるものでもない。それは学生やってれば、俺より気の合う男に出会うこともあるだろう。まだお互い十分若いのだし、束縛しあう必要は何もなかった。

巨大な吊り橋は、龍になる準備を着々と進めていた。やがておびただしい海水を巻き上げながら、龍は悠然と空に躍り上がるだろう。

「ヤス、組手や」

さばきの型と攻撃の型を繰り返したあと、いやがるヤスを無理やり構えさせた。ヤスと組手をするのは何年ぶりだろう。渡り合ってみると、ヤスの動きは鈍かったが、突きも蹴りも以前より重かった。だが洋次が鳩尾に軽く前蹴りを入れると、その場にへたりこんでしまった。

石段の上のよく風の通るところで、二人は上半身裸になって汗を拭いた。造成地の街路やまばらな家にもう灯りがともり、その向こうの低い山並みがくろずんでいた。ジョギングする人や帰宅を急ぐ人かげも見える。まだどこかで仕事をしているのか、大工の釘を打つ機関銃のような音が遠く流れてくる。

突然、そばで、ワアーツ、ワアーツとヤスが叫びだした。青い闇を往復して、こだまがかすかに返ってきた。少し間を置いて、闇の中から、二三の犬が騒然と吠えた。ヤスは叫びをやめない。